

## 「いのちをいただく」

3年 Y.I

みなさんは、食事をする時毎回「いただきます」や「ごちそうさま」を言うことができますか？私は、今回の感話で「いのちをいただく」という本を紹介したいと思います。

この本は、食肉加工センターで働いている坂本さんの仕事を日常について書かれています。食肉加工センターでは、牛を殺してお肉にする作業がなされています。坂本さんはこの仕事がきらいでした。しかし、牛を殺す人がいなければ私達は、牛のお肉を食べることができないのです。ある日、明日殺される予定の牛が積まれているトラックが食肉加工センターに入ってきました。その牛は、女の子にお腹をさすられながら「ごめんね。ごめんね。」と言われていました。その女の子の家は貧しくその牛を売らなければ生活ができませんでした。次の日の朝、坂本さんはピストルのような道具を牛の頭に当てました。するとその牛から涙がこぼれ落ちました。そして崩れるように倒れ、少しも動くことはありませんでした。

私は、この本を読むまでそれぞれの食べ物が出来るまでの過程をそんなに深く考えずに食べていました。したがって私は家で嫌いな食べ物が出ると、よく兄弟と好きな食べ物と交換します。それを見た母は

「食べ物を作った人のことをよく考えて食べなさい。」

といいます。なので、この場面を読んだ時、母がいつも言っているのは、まさにこのような事を指しているのだと分かりました。また、日本では一年間の食品廃棄量が2000万トン以上と世界でも一、二位を争うほど高く、一人あたり日本人は毎日一個のおにぎりを捨てているという事になります。私は日本でこのような事態になっているのは平和になった今食料が豊富にあるからだと考えます。戦争が終わってすぐのころは、食料が少なくなるとまた大家族が多かったため、一粒のお米でも無駄に出来ませんでした。しかし、今世界では食料不足に苦しんでいる人がたくさんいます。飢えや栄養不良による病気で毎日三万人の子供が亡くなっています。ですから日本で捨てている食料を食料不足で苦しんでいる人達に回すことで少しでもそのような人達を減らすことが出来ると思います。

この本は、助産師の内田美智子さんによって書かれました。内田さんは命について「生きているということは、たくさんの命を頂いていること。」と言っています。この言葉は助産師だからこそ言える言葉だと思います。私はこの言葉を目にするまで私達が生きるためにたくさんの動物の命が犠牲になっていることについてあまり関心がありませんでした。けれども殺された命に感謝することが、大事だと思います。

私は、この感話で食べ物や命について学びました。また、気付いたこと、新しく発見したことがたくさんありました。自分で気付くこと、発見することはとても大事なことです。だからこれからはちゃんとした大人になるために、自分に足りないことに気付いたり自分に足りないところを発見していきたいです。また、「命を大切にする」ということについて

学んだことを今後に少しでも生かせるようにしていきたいと思います。そして、この感話で学んだ「食べ物を大切にする」ということを意識して「いただきます」を言えるようにしたいです。